

『日本アジア研究』第16号（2019年3月）

カフカ「一枚の古文書」についての一考察 ——「八つ折判ノート」の一部として読んだ場合——

崎川あんぬ*

カフカの短編「一枚の古文書」は、短篇集『田舎医者』に収録された14作品の一つとして知られている。この作品の草稿は、カフカの遺稿のうち「八つ折判ノート」と呼ばれる小型のノートの一つに残されている。カフカの手書き原稿の複写を掲載した「写真版」(Historisch-Kritische Franz Kafka-Ausgabe)が登場したことで、今日では草稿を現物に近い形で参照することが可能になった。本論では「一枚の古文書」が書かれた「八つ折判ノート3」の写真版を用いて、この小品をブロー版・批判版との比較を交えながら分析し、草稿を参照することの意義を確認する一方で、写真版の編集上の課題を指摘することも試みた。

考察を進めるなかで、同じノートに草稿が残されている他の断片、なかでも特に「万里の長城」との関連性を示す幾つかの重要な根拠が、ブロー版・批判版の編集方針によって覆い隠されていたということがわかり、写真版を用いることの必要性が浮き彫りになったと同時に、ノートを断片ごとに区分けして番号を振るというその編集方法には、編集者の解釈が多分に入り込んでおり、それが多様な読み解きの可能性を封じている場合があるということも確認できた。このことは、曖昧さや主観的な判断をできる限り取り除く、という写真版の基本方針とも矛盾していて、この版の編集における課題であるという結論に達した。

キーワード：カフカ、編集、草稿

1. はじめに

„wir sind aber einer solchen Aufgabe nicht gewachsen; haben uns doch auch nie gerühmt dessen fähig zu sein. Ein Missverständnis ist es, und wir gehen daran zugrunde.“ (DL 266f.)

我々にはそんな責務を負うだけのちからはないし、そんなことができると吹聴したことだって一度もない。これは誤解だ。そして我々はこの誤解のために破滅するのだ。（下線は筆者）

これはカフカの短編「一枚の古文書」¹ („Ein altes Blatt“) の結末部分である。

*さきかわ・あんぬ、埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程

¹ 「一枚の古文書」という訳は池内紀、吉田仙太郎によるものである。他にも「古文書の一葉」(前田敬作)、「一枚の古いページ」(長谷川四郎)等の訳があるが、本論では「一枚の古文書」で統一する。尚、この作品の表記方法については、『田舎医者』などの刊行物名との差別化を図るために、一重括弧で統一することとした。

この作品の初出は 1917 年 9 月に出版された隔月誌『マルジヤス』創刊号² であるが、むしろ『田舎医者』(クルト・ヴォルフ社, 1919 年)³ に収録された 14 作品の一つとして知られている。この短篇では、「皇帝の宮殿」を取り囲む狂暴な「遊牧民」(Nomado) と、それに戸惑い絶望する庶民たちの様子が、一人の「靴職人」による語りを通して描かれている。生きた牛にかぶりつく遊牧民たちの粗暴さと、それを追い払うこともできずに静観するだけの皇帝の無力ぶりとの対比が印象的な作品である⁴。冒頭に挙げた最後の数行は、皇帝に代わって国の防衛を任されることになった庶民たちの嘆きと困惑を表している。

この作品の草稿は、カフカの遺稿のうち「八つ折判ノート」と呼ばれる小さなノートの一冊に残されている。ローランド・ロイスらによって編集された「写真版」⁵ (Historisch-Kritische Franz Kafka-Ausgabe=FKA) の登場により、今日ではカフカの草稿を生原稿に近い形で参照することが可能になった。この写真版には、カフカの手書き原稿の複写と、それを「写实的転写」(diplomatiscbe Umschrift)⁶ と呼ばれる文献学的手法で活字表記化したものとが対になって示されているため、削除や挿入の痕跡を追うことがブローチ版や批判版に比べて容易である。「一枚の古文書」(以下「古文書」と略記)の草稿が書かれた「八つ折判ノート 3」(OH3)⁷ (オックスフォード大学のボドレアン図書館蔵) の写真版は 2008 年に刊行された。

草稿を確認してみると、カフカは前掲の結末部分(正確には下線で示した「そんなことが」以降)を、物語の大部分とは別にノートの方のページに書いていることがわかる。その次のページには短篇集『田舎医者』の目次の構想らしきものが残されているということからも、この「おわり」はカフカが出版を決断するにあたって新たに書き足したものであると推測されている⁸。

² Marsyas. Eine Zweimonatsschrift, 1. Jg., Heft 1, S.80-81. (Vgl. DL App. 287.)

³ Franz Kafka: Ein Landarzt. Kleine Erzählungen. München und Leipzig (Kurt Wolff) 1919. ヴォルフ社が著作権を取ったのは 1919 年だが、実際に出版物として出回ったのは 1920 年である。Vgl. DL App. 298f.

⁴ 物語中の遊牧民たちが使う意味不明の言葉は、コクマルガラス(小型のカラス。ドイツ語では Dohle)の鳴き声に喩えられており、その Dohle がチェコ語では Kafka と同じ発音の Kavka であるということは、この作品の研究において度々取り上げられてきた。

⁵ 編集者のロイスは „Historisch-Kritische Ausgabe“ と定義しているため、この編集は「史的批判版」と訳される場合もあるが、厳密には「史的批判版」の定義を満たしてはいないので、ここでは敢えて「写真版」と表記する。この定義付けの問題については明星聖子「編集の善悪の彼岸—カフカと草稿と編集文献学」『文学』2010 年 9・10 月号, 188-202 頁に詳しい。尚、写真版の成立については、明星聖子『新しいカフカー「編集」が変えるテキスト』(慶應義塾大学出版会) 2002 年、第二部を参照されたい。

⁶ 「写实的転写」については、明星聖子「編集の善悪の彼岸—カフカと草稿と編集文献学」『文学』2010 年 9・10 月号, 193 頁を参照されたい。

⁷ 文献表参照。

⁸ 「ここに引用した箇所(ノートの最後, 39 枚目の裏面)をカフカが書き直したのは、この物語を出版するということを決意したためで、ほとんどやむを得ずそうしたのであった。31 枚目裏面にあった結びの箇所はそのため不要になった」Vgl. Roland Reuß: Franz Kafka-Hefte 6 (Stroemfeld Verlag) 2008=Franz Kafka-Hefte, S. 23.

これ以外にも、草稿にはいくつかの削除や挿入の跡が認められ、カフカが「断片」を「作品化」していくプロセスが露になっている。また、単独の作品として読んだ場合には見えてこない前後の断片とのノート上の位置関係、特に主題の共通性が指摘されている「万里の長城」(Beim Bau der chinesischen Mauer)⁹との繋がりも、草稿を参照することによって確認することができるのである。

そこで本論では前述の「八つ折判ノート3」の写真版を用いて「古文書」の草稿を分析し、書き換えの跡や他の断片との関連性について検証していく。その際、ブロー特版や批判版との比較も適宜行い、草稿を参照することの意義について明らかにする一方で、写真版の編集上の問題点も指摘していきたい。

2. 「八つ折判ノート3」の構成

はじめに「八つ折判ノート」について簡単に説明しておく。八つ折判ノートとは、カフカが執筆に使っていた小さなサイズのノートである。現存が確認されているのは8冊で、その他にも失われたノートが少なくともあと2冊存在していたと推測されている。「古文書」以外にも『田舎医者』の収録作品の幾つかは八つ折判ノートに草稿が残されており、また草稿の見つかっていない作品についても、失われた2冊のノートに書かれていた可能性があると思われている¹⁰。現存する8冊のノートについては、マックス・ブロー特によって1〜8までの番号が付けられたが、今日ではこの順番は間違っていることがわかり、マルコム・ペイスリーらが編集した「批判版カフカ全集」(Kritische Kafka-Ausgabe)¹¹では新しい順序に並べ替えた上でA〜Hまでのアルファベットを用いて類別している。また前述のロイス編集の写真版では、新たに1〜8の番号が各ノートに付された。「古文書」の草稿が書かれた「八つ折判ノート3」(批判版ではノートC)の執筆時期について、ペイスリーは1917年2月〜3月と推定している¹²。

では「古文書」の草稿が「八つ折判ノート3」(以下「ノート3」と略記)のどこに位置するのかを確認しておこう。八つ折判ノートの編集にあたって写真版ではノート上の各断片に番号を付けて区分している。[表1]はその写真版の区分けをもとに筆者が独自に作成したものである。断片番号の1〜30については編集者のロイスによる分類であるが、例えば「4-①」、「7-①a」のような細かい分類は、筆者が便宜上行ったものであることを先におことわりしておく。以下、この表の番号に従って論をすすめていく。分類の方法については後述する。

ロイスの分類方法に従えば、「古文書」の草稿は30の断片のうち「断片7」に、その前に書かれた「万里の長城」(以下「長城」と略記)の草稿は「断片4」

⁹ 新潮社全集では『シナの長城』となっているが、本論では「万里の長城」で統一する。『田舎医者』の収録作品である「一枚の古文書」とは違って、「万里の長城」は生前刊行物ではなく、ブロー特が編集して全集の第2巻に収めたものである。

¹⁰ Vgl. DL App. 288.

¹¹ 「批判版カフカ全集」の成立過程、および編集方針については、明星『新しいカフカ』69-92頁に詳しい。

¹² Vgl. NS I App. 86.

にあたる。これ以降、「断片4」は「長城」、「断片7」は「古文書」の草稿であるということを念頭に置いた上で論を進めていく。「断片4」と「断片7」は、番号上は離れているように見えるが、その間にある「断片5」は〈5 Mill〉の一語だけで、また「断片6」も二文から成る短い断片なので、「断片7」と「断片4」とは、実際にはかなり近い位置にある（〔表1〕参照）。

表1：「八つ折判ノート3の構成」

（太字表記は太い筆記具で書かれた部分。削除は横線で示した。例：aus China）

断片番号	写真版ページ	各断片の冒頭部
1	S.4(1r) Z.1-S.8(2r) Z.14	Ich hätte mich～
2	S.8(2r) Z.15-S.11(2v) Z.16	Als die kleine Maus～
3	S.11(2v) Z.17-S.12(3r) Z.18	Nach einigen Irrung～
4-①	S.12(3r) Z.19-S.96 (24r) Z.16	Beim Bau der chinesischen Mauer～
5	S.96(24r) Z.17	5 Mill（一語だけ）
4-②	S.96(24r) Z.18-S.111(27v) Z.12	ruhig unter der Sonne wandelnd～
6	S.111(27v) Z.13-S.112(28r) Z.1	Einmal an einem Winternachmittag～
7-①a	S.112(28r) Z.2-S.127(31v) Z.7	[Ein]Ein altes Blatt aus China～
7-①b	S.127(31v) Z.8-S.127(31v) Z.22	Diese (Vielleicht allzusehr europäisierende)～
8	S.127(31v) Z.23-S.136(34r) Z.1	Es war ein Sommer ～
9	S.136(34r) Z.2-S.136(34r) Z.7	Könnte ich noch andere Luft schmecken.～
10-13 省略（Ich bin latüde...から「コウノトリ」の断片まで）		
14	S.151(37v) Z.14-S.152(38r) Z.19	Der Quälgeist～
15	S.152(38r) Z.20-S.156(39r) Z.22	Endlich sprang ich vom Tisch～
7-②	S.159(39v) Z.1-S.159(39v) Z.4	haben uns doch auch nie～
16	S.159(39v) 行特定不能	Steuer！逆さまに記入
17	S.160(40r) Z.1-Z.12	Ein Traum～（『田舎医者』目次）
18	S.160(40r) Z.13-Z.15	Henny Rosenthal～
19-29 省略（全て一語ずつの短い断片） S.160(40v)		
30	S.163(40v) Z.32-Z.33	Heftkaufen Sophie

尚、この表で例えば（28r）とは40枚あるノートの「28枚目表面」、同様に（28v）は「28枚目裏面」を意味する（rはrecto＝表、vはverso＝裏の略）。写真版ではページの下方に振ったページ番号の他に、この番号体系も併用している。こちらの番号体系の方がノート上の位置を把握しやすいので、本論でも必要に応じてこの表記方法を使用する。〔図1〕は写真版のページのイメージ図である（113、114は実際には表記されていないが、便宜上、括弧付きで示した）。

表面		裏面	
<28r>			<28v>
写实的転写	手書き原稿	手書き原稿	写实的転写
112	(113)	(114)	115

図 1：写真版のページ番号体系

〔表 1〕を見て分かるように、「断片 7」は「断片 4」と同様に二つの部分に分かれている。この表では、最初のブロックに①、後のほうに②と番号をつけておいた。「断片 7-①」は 112 ページ (28r) の 2 行目から 127 ページ (31v) の 22 行目までの部分で、物語の大部分を占めるのはこちらである。ここから話が少し複雑になるが、「断片 7-①」の最後のページである 127 ページ (31v) の 8 行目と 9 行目の間には横線が引かれていて、この線以降は出版された「古文書」には反映されていない。この横線については後でもう少し詳しく述べるが、今後の考察にあたって線の前後を分けて考える必要があるので、①を更に二つに分けて、線の前までを「断片 7-①a」（以下「7-①a」と略記）、後を「断片 7-①b」（以下「7-①b」と略記）とする（ただし、下の〔図 2〕に図解したとおり、8 行目は 9 行目に挿入される形になっているので「線の後」に入る。従って 7 行目までが「線の前」ということになる点に注意が必要である）。〔表 1〕を見ると 7-①a と 7-①b の間が点線になっているが、それがちょうどこの「線」にあたる。草稿には所々に横線が引かれていて¹³、ロイスは基本的にこれらの線を断片の切れ目を示すための分岐線と捉えて分けを行っているようである。しかしこの「7-①a」と「7-①b」の間にも分岐線が引かれているにもかかわらず、分けを行う際にロイスは線以降の部分、つまり「7-①b」の部分から断片番号を改めることはしていない。従って、ロイスは「7-①b」を独立した断片としてではなく「7-①a」の続きと見なしていると考えられる。この判断の是非については、後ほど考察の対象としていく。



図 2：線の前後の図解

¹³ 横線には長いものも短いものもあるが、ロイスはあまりそれを区別してはいないようである。

「断片 7-②」（以下「7-②」と略記）は 159 ページ（39v）の 4 行分だけで、これが冒頭で挙げた結末部分に該当する。〔表 1〕からも分かるように、「7-①」と「7-②」の間には 8~15 までの断片が挟まっている。「7-②」は 30 の断片のうちの「断片 15」と「断片 16」の間に書かれているため、数字のうえではノートの中あたりに位置するように見える。しかし、実際には 40 枚あるノートのうちの 39 枚目（159 ページ）、つまり後から 2 番目の紙に書かれている。「断片 16」以降は殆どが一語から成る短いものであって、それらは全て 159 ページ（39v）以降に収まっているので、番号上は真ん中あたりでも実は最後の方のページにあたるのである。ちなみに冒頭でも述べたが、7-②に続く 160 ページ（40r）には『田舎医者』の目次の構想らしきメモ（写真版では「断片 17」）が残されていることから、この②の部分が出版の目論みと関連しているということが伺える。このようにノートでは離れた位置にある ① と ② を、写真版では同じ「断片 7」として括っているが、これは『田舎医者』の収録作品としての「古文書」の構成を念頭においてのロイスの判断であろう。

31v 断片 7-①a の末尾 <hr/> 断片 7-①b <hr/> 断片 8 127	39v 断片 7-② haben uns doch nie~ (4 行) 159
--	--

図 3：127 ページ(31v) および 159 ページ(39v) の図解

もう一度整理すると、

- 「断片 7-①a」は出版された「古文書」のうちの大部分
- 「断片 7-①b」は出版されたものには使われていない部分
- 「断片 7-②」は出版にあたって書き直されたと推測される結末部分

ということになる。尚、①a、①b、②という記号を使っの細かい分類はロイスによるものではなく、本論筆者による便宜上のものであるということを今一度確認しておく。ロイスによる分類は 1~30 の断片番号だけである。ノートの構成が確認できたところで、次に前後の断片、特に前に書かれている「断片 4」（「長城」草稿）との関連性について、プロット版や批判版との比較を交えて考察していきたい。

3. 「万里の長城」との繋がり

「断片 7」（「古文書」草稿）で最初に目を引くのは、タイトルが **Ein altes Blatt**

aus China¹⁴ となっていることである。つまり「中国からの一枚の古文書」（下線は筆者）から「一枚の古文書」へと変更されている。この削除された **aus China**（中国からの）の痕跡から、「断片 7」が同じノートに書かれた「断片 4」（「長城」草稿）を中心とするいわゆる **China-Komplex**¹⁵（中国をテーマとした一連の物語群）の構成要素であるという見方ができるであろう。このことは八つ折判ノートの詳細な分析で知られるアネッテ・シュッテルレによっても指摘されている¹⁶。

また前述のとおり「断片 7」は、(Einmal an einem Winternachmittag から始まる短い「断片 6」¹⁷ を一つ間に挟んではいるものの)、「断片 4」のすぐ後に書かれている。この草稿上の繋がりから、また削除された「中国」以外にも「遊牧民」(Nomado)、「皇帝」(Kaiser) などの語彙が共通していることから、「断片 7」を「断片 4」の関連テキストと見なすことは妥当であると考えられる。

またシュッテルレは、以下に見る「断片 4-②」の削除箇所と「断片 7」との関連性を指摘している。

見知らぬ船頭が——私は普段ここを通る船頭なら大抵はわかるのだが、その男は見たことがなかった——~~その男はこう話した。大きな壁が、皇帝をお守りするために、建設されるらしい。皇帝の宮殿の前に、しばしば不信心な連中が走って集まっているのだ。そしてやつらの中には悪魔もいて、皇帝に向けて黒い矢を放つ。~~ (OH3 111)

引用した箇所は、語り手の父親に見知らぬ船頭が長城建設を知らせにくる、という場面¹⁸の最後の数行である。上の訳文ではカフカによる削除の跡も再

¹⁴ タイトルの部分は少し太い筆記具で書かれているので太字で表記した。筆記具が変わっていることから、この部分は後から書かれたものであると推測される。**aus China**の消し方は、手書き原稿では短めの斜め線 5 本で削除しているが、右側の活字表記では横線一本で消されている。他の箇所では活字表記でも斜め線による削除を再現しており、技術的には可能であるにもかかわらず、この部分については横線になっているというのは、細かいことであるが問題視すべきである。

¹⁵ **China-Komplex** には、1917 年に書かれた八つ折判ノートの作品以外にも、1920 年に書かれた「町の紋章」「徴兵」等の幾つかの断片も含まれるとされている。尚、この **China-Komplex** という括り方はカフカ自身によるものではない。

¹⁶ Annette Schütterle: Franz Kafkas Oktavhefte. Ein Schreibprozeß als „System des Teilbaues“ Freiburg (Rombach Verlag) 2002, S.159.

¹⁷ „Einmal an einem Winternachmittag...“ で始まるこの「断片 6」についてシュッテルレは、「八つ折判ノート 4」に草稿が残されている「隣人」（表題はプロートによるもの）との主題の共通性を指摘している。Vgl. Schütterle, a. a. O. (2004) S. 159. この始まりの部分、白水社の『カフカ小説全集 5』では「クリスマスの午後のことだが」としているが、これは Winter（冬）を Weinachten（クリスマス）と見間違えたことによる誤訳であろう。

¹⁸ プロートはこの船頭のくだりを、「万里の長城」の「断片」として巻末の付録に入れている。オットラに贈ったリヒャルト・ウィルヘルム翻訳の『中国の民話』の本には献呈の辞として「〈地団駄を踏みながら小舟に飛び乗った船頭〉より」と書かれてい

現してみた。長い斜線で消されたこの箇所は、「断片 4-②」の最後の部分にもあたる。この後に前述の短い「断片 6」を挟んですぐに「断片 7」（「古文書」草稿）が始まるのである。シュッテルレは「断片 7」を、この削除箇所の書き直しであると推測しており¹⁹、このような読みが「断片 4」と「断片 7」の関連性を一層裏付けるものとなっている。先ほどの削除箇所にある「皇帝に向けて矢を放つ悪魔」と「断片 7」の「皇帝の宮殿前を占領する遊牧民」とを同一視しての解釈であろう。この点に関してはヴォルフ・キッター／ゲルハルト・ノイマンや中澤英雄も同様の見解を示しているが²⁰、こうした気づきは、この削除箇所と「断片 7」とのノート上の位置関係を知ることによって促されるものである。

このような「断片 4」と「断片 7」との関連性について、批判版やブロート版のみを用いて検証することには限界がある。批判版の『遺稿集 I』では基本的にノートの秩序がそのまま伝えられているので、ふたつの断片の位置関係を認識することはできる。しかし削除箇所をヴァリエーション(異文)として資料編に入れてしまうという編集方針が、文脈の繋がりや語彙の共通性について分析するにあたっては弊害となっている。例えば後掲の〔図 4〕をご覧頂くと分かるように、上に引用した削除箇所(矢を射る悪魔のくだり)は、批判版では資料編に入れられているので本文中には残されていない(NS I App. 302f.)。従って「断片 7」の冒頭部との草稿上の位置関係を認識することは難しい。前述の「中国からの」(aus China)の削除についても、資料編にあたらなければ分からないので、見過ごされてしまう可能性がある。

またブロート版全集では、「断片 7」にあたる部分（「7-①b」は除く）は『田舎医者』の収録作品「一枚の古文書」として、生前刊行作品を収めた第 1 巻に入れられている。一方で作品としては未発表であった「断片 4」は、ブロートが編集した上で「万里の長城」として第 5 巻に収録されているため、二つの断片の連続性を確認することは不可能である。「古文書」と「万里の長城」とのテーマの共通性についてはブロート自身も全集第 5 巻の後書きのなかで言及している²¹。しかし作品として出版された「古文書」には「中国」という言葉は全く残されていない。従って、この重要な語彙が共通している(削除されているので正確には「していた」ということをブロート版の読者が知ることはできないのである。ブロート自身は草稿を見ているので、これらの情報をいわば独占していたわけだが、読者自らがそれを確認する術を編集によって絶てし

るが、それとこの断片との関連を指摘したのはヨスト・シレマイトである。Vgl. Jost Schillemeit: *Unbekannte Bote*. In: *Kafka-Studien*. Hrsg. von Rosemarie Schillemeit (Wallstein Verlag) 2004, S. 245.

¹⁹ Schütterle, a. a. O. (2004) S. 159.

²⁰ Vgl. Wolf Kittler und Gerhard Neumann: *Kafkas „Drucke zu Lebzeiten“*. In: Franz Kafka: *Schriftverkehr*. Hrsg. von Wolf Kittler / Gerhard Neumann (Rombach Wissenschaft) 1990, S. 66. 中澤英雄『カフカ・ブーバー・シオニズム』(オンブック) 2011 年, 235 頁.

²¹ ブロート版第 5 巻のあとがきで、1920 年に書かれた「却下」と「掟の問題」について、「どちらも(短編集『田舎医者』のなかの)『古文書の一葉』とおなじく、物語ないし主題の点で『シナの長城』と連関しているが」と言及している。フランツ・カフカ(前田敬作訳)『ある戦いの記録／シナの長城』[決定版カフカ全集 2] (新潮社) 1981 年, 273 頁.

まったといえる。ただしブロートは先ほどの「矢を射る悪魔」のくだりを巻末の付録のなかに残しており、この部分に関してはかえって批判版よりも救いがあるとも考えられるのだが。

以上から分かるように、批判版・ブロート版からは読み取れないような「断片 4」と「断片 7」との関連性が、写真版を通して見えてくるのである。この二つの断片の関係を踏まえた上で、次節では「断片 7」の構成と内容に足を踏み入れていく。その際、特に注目したいのは、出版の際には使われていない箇所、つまり〔表 1〕で「断片 7-①b」とした部分の扱いである。

4. 「断片 7」の分析

それでは「断片 7」がどのように書き進められているのかを見ていくこととしよう。〔表 2〕はその構成を簡略にまとめたものである。表中の①a, ①b, ②の分類については、〔表 1〕と共通している。

表 2: 「断片 7」の構成

	写真版	概要	批判版, ブロート版
① a	112 Z.2 ~ 127 Z.7	<ul style="list-style-type: none"> 語り手の靴職人の独白の始まり。遊牧民たちによる町の占領の様子。日に日に増える遊牧民への恐怖。広場を汚されることへの困惑。 遊牧民とのコミュニケーションの不可能性について。コクマルガラスのような叫び声。 遊牧民たちの恐ろしい形相について。生きた雄牛にかぶりつく様子。 頭を垂れて、城前のさわぎを見ているだけの皇帝。 国の防衛を突然任された庶民の困惑。(この部分は引用符で括ってあるため、「皆」の言葉を靴職人が伝達する形になっている。) 「我々にはしかしそんな責務を負うだけのちからがないし」までが出版されたものと同じ。その後の、「そのことは日一日、はっきりとわかる」を削除。速記で <i>haben uns doch auch nie</i> (②の冒頭部と同じ) と記入。 	<p>*批判版 NS I 358 Z.6 ~ 361 Z.9</p> <p>DL 263 Z.17 ~ S.266 Z.27</p> <p>*ブロート版 第 1 巻に『田舎医者』のなかの一つ「一枚の古文書」として収録。</p>
①b	127 Z.8 ~ Z.22	<p>別の語り手の登場。「中国の古文書数枚」について以下のように語られる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「ヨーロッパ的すぎる翻訳」である。 友人からもらったものである。 この後の頁が損傷していて、そこから確かなことは何も分からない。 	<p>*批判版 NS I 361 Z.12 ~ 361, Z.20</p> <p>ブロート版 欠落</p>
②	159 Z.1~4	<p><i>haben uns doch auch nie....</i> 「そんなことができると吹聴したことだって一度もない。これは誤解だ。そして我々はこの誤解のために破滅するのだ。」</p>	<p>*批判版 NS I 361 Z.9~11</p> <p>DL 266 Z.27 ~ 267, Z.2</p> <p>*ブロート版 ①に続けて第 1 巻に。</p>

物語の大部分を占めるのは「断片 7-①a」(以下①a と略記)で、それに後から書いた「断片 7-②」(以下②と略記)を繋げたものが、出版された「古文書」である。本論冒頭でも述べたように、①a は「我々にはそんな責務を負うだけのちからはないし」(wir sind aber einer solchen Aufgabe nicht gewachsen)で終わっているのだが、実はその後に「そのことは日一日とはっきりわかる」(das sehe ich von Tag zu Tag deutlicher)と続けて書いていたものを削除していることが草稿から見て取れる。初めカフカはこの言葉で靴職人の語りを締めくくろうとしていたのかもしれない。その下に haben uns doch auch nie, つまり②の最初の部分を速記で書き付けているが([表 2] 参照), これは後で書き足した結末である②をここに挿入する, ということを示すためのメモ書きであろう。前述のように、ロイスは「古文書」には使われていない「断片 7-①b」(以下①b と略記)の部分も含めて「断片 7」として一括りにしているが、ここではその①b の部分の草稿の状態および内容を分析することを通して、その判断の妥当性について考察していきたい。①a および②の部分についての詳細な分析を行うためには、また別の問題設定が必要になるので、本論では表に概要を示すに留め、深く立ち入ることはしない。

すでに 1.「八つ折判ノート 3 の構成」でも述べたとおり、①a と①b の間には横線が引かれているのだが(前掲の[図 2] 参照), ロイスはこれを区切りとは考えていないらしく、ここで断片番号を改めていない。そのことから、ロイスが①b を独立した断片としてではなく、①a の続きであると見なしているということが分かる。またロイスは「八つ折判ノート 3 と 4」の解説書(Franz Kafka-Hefte 6)のなかで、159 ページ(39v)の 4 行(本論で②と呼んでいる部分)は出版に際してカフカが「仕方なく」(zwangsläufig)書き直したもので、「31v にある結びの部分は、そのために不要となった」と分析している²²。つまり①b は②の前に書かれたもう一つの「おわり」であって、出版にあたって最終的には廃棄され差し替えられたヴァリアント(異文)のようなものだと考えているのである。

ではなぜロイスはそうに判断したのだろうか。その理由は草稿の状態から推測できる。①b が書かれている写真版 127 頁(31v)を確認してみると、①a と①b の間はかなり詰まっているように見える。その間の分岐線も狭い行間を通っていることから、もともとは続けて書かれたものを後から線で仕切ったのだとロイスは判断したのではないだろうか。上記のような外観上の条件から見ても、また「中国の古文書」についての言及であるという内容的なことからも、この判断には一定の妥当性があるように思われる。その一方で①b とその下の Es war im Sommer で始まる「断片 8」(ブロー版では「中庭の門をたたく」との間の分岐線は行間をしっかりと空けて余裕をもって引かれており、また内容的にも明らかに違うテーマに切り替わっていることから、カフカが区切りを初めから意識して「断片 8」を書き始めたということが伺え、①a と①b との間の分岐線の場合とは好対照をなしている。

①b を①a の続き、もしくは「古文書」のもう一つの「おわり」と考えるロイスのこの判断の一つの仮説として念頭に置いた上で、ここでは一旦この判断に身を委ねて①b の内容を分析していく。

²² Franz Kafka-Hefte 6, S.23. (本論の注 8 参照).

まず①b の箇所 of 原文および和訳を以下に引用する．（表記方法は筆者が一部変更，<>は挿入，斜体は速記，:[]:は削除後に復活させた部分を示す）

Diese < (vielleicht *allzusehr* europäisierende) > Übersetzung einiger alter chinesischer Manuscriptblätter stellt < uns > ein Freund der Aktion ~~ihre~~ zur Verfügung. :[Es ist ein Bruchstück]:[.]. Hoffnung, dass die Fortsetzung gefunden werden könnte besteht nicht.

< >

Hier folgen noch einige Seiten, die aber allzu beschädigt sind, <als> dass ihnen etwas bestimmtes entnommen werden könnte. (OH3 127)

この中国の古文書数枚の（もしかしたら過度にヨーロッパ的かもしれない）翻訳は、活動での友人のひとりが、<我々に>自由に使えるようにしてくれたものである。:[それは断片であつて]:, 続きが見つかるかもしれないという見込みもない。

< >

まだ数ページが続いているが、損傷が非常に激しく、そこから何か確かなことを読み取ることはできないだろう。

真ん中あたりにある空白のままの山括弧が目を引く．この山括弧について批判版の編集者ペイスリーは、その後の文章のなかの「損傷したページ」を表していると解釈しており²³、シュッテルレもその点についてほぼ同じ見解を示している²⁴．またロイスはこの部分について、八つ折判ノートのなかでも他には例のない特徴的な箇所であると指摘しているが²⁵、このような個性的な表現方法からは、カフカが出版の目論みに捕われずに自由に筆を走らせていることが伺える．しかしこの山括弧が本当はどのような意図で書かれたのか、続いている「数ページ」とは何の「続き」なのか等については、はっきり読み取れるわけではない．大変に難解な箇所であるため、この部分については本来、より詳細な分析が必要であるが、ここでは幾つかの点に絞って論じていく．

この①b の部分を読んでみると、ここでの語り手は①a の「靴職人」ではなく、古文書を読んでいる誰か別の人物であるということが分かる．しかも「中国の古文書」を「翻訳」で読んでいる、ということから「中国人」でもないということがわかるので、「中国南東部の出身」(OH3, 56)である「長城」の語り手でもないということになる．①a とは語り手が代わっているの、ここから全

²³ 「(草稿のなかの大きな) 山括弧は明らかにテキストのなかで言及されている〈損傷したページ〉を示唆している」(NS I App. 306)

²⁴ Schütterle, a. a. O. (2004) S. 162.

²⁵ Franz Kafka-Hefte 6, S. 20.

く新しい断片が始まったという見方もできるが、この①bの部分が「中国の古文書数枚」(einiger alter chinesischer Manuscriptblätter)を話題にしているということ を考慮すると、(もともとは「中国からの一枚の古文書」(„Ein altes Blatt aus China“)と題されていた)①aとの関連性は否定できない。そこでロイスの見方に従ってこの部分をそれ以前の続きであると考えれば、匿名の誰かによるこの語りは、①aの内容についての言及ということになる。そして物語の渦中の人物による主観的な独白である①aとは対照的に、部外者である①bの語り手は、「古文書」のなかで繰り広げられるできごとから距離をとって客観的に発言する「もう一つの視点」として機能する。

①bの要点を以下に列挙すると、次のようになる。

- ア. この「古文書」は、中国語から翻訳されたもので、しかも「過度に」(allzusehr)「ヨーロッパ的」かもしれない翻訳である。
- イ. ①bの語り手が、「友人のひとり」から受け取ったものである。
- ウ. 古文書は複数枚ある。
- エ. 続きが何ページか存在しているが、ひどく損傷していて読めない。

①bが①aについての言及であると仮定するならば、ここで注目すべきはこの新しい語り手によって①aの内容の信憑性が揺らいでくるということである。先ほど列挙した要点のうちアとイ、つまり「過度にヨーロッパ的な(allzusehr europäisierende)」な翻訳であるということ、および「友人(ein Freund)から貰い受けたものである」ということに焦点を当てていこう。これらの点をシュッテルレは次のように解釈している。

仲介者および翻訳者としての「友人」を差し挟むことで、ここで話している人物はテキストから引き離される²⁶。

シュッテルレの言うように、「翻訳という経過」(ein Übersetzungsvorgang)²⁷と「友人」を介在させることによって、この語り手は「古文書」というテキストから距離を取っており、その内容の信憑性についての責任を匿名の誰かに転嫁している。しかもこれは、ただの翻訳ではなく「過度にヨーロッパ的」かもしれない翻訳なのである。この速記で書かれた「過度に」(allzusehr)という言葉は、その前の「かもしれない」(vielleicht)によって和らげられてはいるものの、非常に強い表現である。その後の「損傷が非常に激しく」という箇所「非常に」には〈allzu〉という強調の副詞が使われているのだが、それに英語の〈very〉にあたる〈sehr〉が付くのでから相当に「行き過ぎた」場合に適用される副詞と言えるだろう。そこまで行き過ぎた翻訳ということは、ほぼ事実を伝えていないにも等しい。少なくとも我々に提示されている「古文書」の内容、つまり靴職人の報告は、「根も葉もない」とまでは言えないまでも、酷く歪められていて、ほとんど信じるに値しないということになる。もしこの①bでの発

²⁶ Schütterle, a. a. O. (2004) S. 161.

²⁷ ebd.

言が①aと連動しているとするならば、カフカは靴職人に惨状をたっぷりと語らせた直後に、もう一人の語り手を通してその信憑性についての疑念を表明しているということになるのである。

次に、先ほど挙げた要点のうち、ウとエの二つに注目してみよう。作品化にあたって後から書き加えられたと推測される「一枚の古文書」というタイトルから、カフカが①aと②の部分、つまりは「靴職人」の独白を「一枚」の紙に書かれたものであると想定していることがわかる。しかし①bの語り手の手元には複数の文書があるということ、また更に「数ページ」が続いているということは、そのタイトルとは噛み合わない。つまりここでは靴職人による独白の「一枚」以外に「数枚」が存在することになっているのである。この複数の紙をどのように理解するべきなのだろうか。

ここで一つ仮説を立ててみたい。これまで見てきたように、「断片 4」と「断片 7」は草稿上の位置関係からも、また内容の面でも繋がっている。この関連性を重視するならば、「中国の古文書数枚」には「断片 4」も含まれていると仮定することはできないだろうか。「断片 4」も一人の「中国人」による「長城建設」に関する報告書なのだから、そう考えても不思議ではないだろう。

しかし、ここで写真版の分けが足かせとなる。写真版の分けに従えば、この①bの部分はあくまでも「断片 7」の一部である。しかしこの「古文書数枚」に「断片 4」が含まれるということになると、ここでの語り手の発言はその分けによる境界線を乗り越えて、「断片 4」にまで影響を及ぼすということになる。例えば、①bの語り手は「靴職人」の話の信憑性に疑問を投げかけているが、その語り手の懐疑的な視線は、同時に「断片 4」にも向けられているとも考えられる。しかし、①bの部分に「断片 7」という枠をはめてしまうことによって、読者はおのずと「古文書」の範囲内でこの部分を捉えようとするため、この仮説のような断片番号に縛られない読みの可能性が封じられてしまうのである。そのような弊害を考えると、この①bの部分については、分岐線に素直に従って断片番号を改め、独立した断片として提示しておき、前後と関連付けて読むかどうかを読者に委ねるほうが得策であるようにも思われる。

①bの部分を①aの、あるいは「古文書」の関連テキストとして読むことについては筆者も異論はない。しかし①bは「古文書」だけでなく、「断片 4」つまり「長城」の関連テキストでもあり得るし、むしろそう考えることによって「複数の紙」の存在を理解することができるのではないだろうか。写真版の分けは、複数の紙についての言及である①bを「一枚」の紙に関する文脈に押し込むという矛盾を孕んでいるのである。

さて、ここまでの考察から①bを①aの続きと見なすロイスの分けの妥当性と限界が確認できたが、次にこの①bの部分が批判版・プロット版ではどのように扱われているのか見ていくこととする（後掲の図 4 参照）。

批判版では、①aと①bの位置関係は非常に見えにくくなっている。なぜなら①aの後に、②を直接つなげているからである。つまり出版されたものと同じ形で一旦話を終わらせてしまい、その後に行間を空け、区切りを示す横線を引いた上で①bの部分に戻っているのである。もう少し分かり易く言うと、写真版では①a→①b→②であるものが、批判版では①a→②→①bとなっていて、

しかも②と①bの間に行間を空けた上で分岐線を引いているので、①aと①bが草稿上では連続しているということを読み取ることはできない。このような位置関係については資料編で示すことも難しいので、①aと①bの繋がりを意識しにくい。そのため、二つの箇所の内容的な関連性にも気づきにくくなってしまうという点が問題である。ただし批判版では、この部分の独立性が確保されているため、前述の写真版の場合のような区分けによる弊害は起こりにくいという利点がある。視覚的にも①bは①aと別の断片としてはっきり区切られていて、写真版のように①bを①aの続きとして一つの断片番号で括るという考え方が絶対的なものではないということがわかる²⁸。

ではブロー版ではどうなっているだろうか。前掲の〔表2〕および後掲の〔図4〕を見て頂くと分かるが、ブロー版では①bは完全に欠落してしまっている。ブローは『田舎医者』の一部としての「一枚の古文書」を第1巻に収めたことで事足りると判断したのか、①bの部分はノート上では削除されていないにも拘わらず全く無視してしまった。八つ折判ノートに書かれたもののうち、断片的な性格が強く作品化が難しい部分をブローは全集の第6巻に収録しているのだが、この部分については残念ながらそのような措置もとられていない。

このように、①bの部分の扱いかたは編集によって異なっており、特に①aとの執筆の連続性については、写真版以外の二つの版から読み取ることは困難であることがわかる。連続性が認識できないということは、即ち内容の面でも関連付けて考えにくいということになるだろう。前述のように①bには作品化された「古文書」からは得られない様々な情報が含まれており、この部分を意識するかどうかは作品の理解にもかかわってくるはずである。そのように考えると、このような版による違いは解釈の違いにも繋がるということになる。

出版に使われた結末部分である②と①bとが大きく異なっている点は、語り手の視点である。①aと同様に「渦中の人物」によって語られる②と違って、①bには物語を「部外者」として傍観する視点があることが特徴的である。一方、②では「祖国の防衛」という過剰な責務を負わされた庶民たちの困惑が強調されており、①bとはまた違った方向に物語は導かれている²⁹。

²⁸ 前述のように、①aと①bの間が詰まっているということがロイスの区分けを後押しする一つの根拠となるようにも思われるが、少し遡って〔図2〕を見て頂くとわかるように、分岐線の上の一行（8行目）は線の下（9行目）に挿入される形になっている。もともとは行間を空けてから線を引いて一区切り付けたところに、後から8行目を挿入したために行間が狭くなってしまったという可能性もないとは言えない。もしそうだとすれば、やはりここでは他の箇所と同じように分岐線に従って区分けを行うべきだということになる。もっとも、このような考えは憶測の域を出ず、これによって「①aと①bは続けて書かれて後で仕切られた」という考え方を完全に否定するだけの根拠にはなり得ないが、ここではもう一つの可能性についても提示しておいた。

²⁹ 作品としての「古文書」をロバートソンは「責任」を主題とした作品として紹介しているが、これは②の部分重視しての解釈であろう。Vgl. Ritchie Robertson: *Judaism, Politics, and Literature*. Oxford (Oxford University Press) 1985, S.136ff.

写真版

断片 1~5
断片 4-② 船頭と父の会話 ＜矢を射る悪魔＞
断片 6 Einmal an einem Winternachmittag...
断片 7-①a „Ein altes Blatt aus China“
断片 7-①b Diese (vielleicht <i>allzusehr</i> <i>europäisierende</i>)
断片 8~15 Es war im Sommer ...
断片 7-②haben uns doch...

批判版

断片 4-② 船頭と父の会話
断片 6 Einmal an einem Winternachmittag...
断片 7-①a + 断片 7-② (分岐線なし) „Ein altes Blatt “ + haben uns doch nie...
断片 7-①b Diese (vielleicht <i>allzusehr</i> <i>europäisierende</i>)...
断片 8 Es war im Sommer...

プロート版

断片 7-①a + 断片 7-② „Ein altes Blatt “として <u>第 1 巻に</u>

船頭と父の会話 ＜矢を射る悪魔＞ 「万里の長城」断片として <u>第 5 巻付録に</u>
--

断片 6 Einmal an einem Winternachmittag... 「八つ折判ノート 6」の断片 として第 6 巻に

*断片 7-①b 欠落



＜矢を射る悪魔＞ 資料編へ

*波線以下は省略

図 4：各版の構造

5. おわりに

「一枚の古文書」の草稿を中心に分析を進めてきた本論での考察を通して、カフカが「断片」から「作品」を作り上げていくにあたって草稿にどのような変更を加えてきたのかを検証することができた。また、ブロート版・批判版からは読み取ることが難しい前後の断片との関連性についても理解が深まった。特に「万里の長城」との共通性、執筆の連続性については、写真版を用いて草稿を参照することによって、その根拠がより具体的に認識できることがわかった。このような断片間の繋がり、作品の解釈にも影響を与えるであろう。「万里の長城」についてはユダヤ性およびシオニズム的な文脈における読み解きが主流となっているが³⁰、本論で見てきたような二つの断片の関連性を重視するならば、この「古文書」の物語についても、そのような視点からの考察が必要になってくるはずである。

また、写真版では「古文書」の一部と捉えられている部分（本論では「断片 7-①b」）の扱いが、版によって大きく異なっているということもわかった。この部分の位置付けをどのように考えるかということは、作品の解釈にも大きくかかわってくると思われる。本論で提示した仮説に則って、この箇所が「一枚の古文書」のみならず「万里の長城」についての言及でもあると読むことが可能ならば、ここでの語り手は、この二つの断片の中のできごとを、「中国」ではない別の場所から客観的に見る新たな「視点」として重要な役割を担うことになるであろう。この箇所がブロート版から欠落しているということは非常に残念なことである。

本論での考察を通して、草稿を検証することの意義を確認することができた。そして、写真版の役割の大きさを改めて認識した。しかし一方ではロイスの編集方針についての疑問もいくつか浮かび上がってきた。例えば断片番号による区分けの仕方、「写實的転写」の表記方法などについて、各所に一貫性のなさが見受けられる。特に区分けについては、「仮説として語られるにすぎないこと」を「取り去る」³¹ という編集方針、つまり主観的な憶測に基づく判断を極力排除するという編集方針を自ら掲げているにもかかわらず、彼の主観的な解釈が多分に反映されており、それが多様な読みの可能性を遮断しているとも考えられる。写真版を用いての分析にあたっては、そのようなことを念頭におく必要があるだろう。本論でその点について詳しく取り上げる余裕はなかったが、さらに今後の研究のなかで指摘していくこととする。草稿の分析から得られた結果を踏まえて、この作品の新たな解釈の可能性を探っていくことを今後の課題としたい。

³⁰ シオニズムに関連づけての解釈については、ギュンター・アンダース、リッチー・ロバートソン、ヨスト・シレマイト等がそれぞれに説得力のある根拠を示しており、その主張は一定の妥当性を有している。

³¹ Roland Reuß: Franz Kafka-Hefte 5 (Stroemfeld Verlag) 2006, S. 3.

参考文献

A.一次文献

1) 写真版カフカ全集

Kafka, Franz: Oxfordter Oktavhefte 3 & 4. Historisch-Kritische Ausgabe, sämtlicher Handschriften, Drucke und Typoskripte. Hrsg. Von Roland Reuß und Peter Staengle. Frankfurt a. M./Basel (Stroemfeld Verlag) 2008. = 『オックスフォード大学蔵八つ折判ノート3と4』のうち H3=OH3

2) 批判版カフカ全集

Kafka, Franz: Kritische Ausgabe, Drucke zu Lebzeiten. Hrsg. von Wolf Kittler, Hans-Gerd Koch und Gerhard Neumann. Bd. I: Text. New York/Frankfurt a. M. (S. Fischer) 1994. = DL (生前刊行書集)

—— Drucke zu Lebzeiten. Hrsg. von Wolf Kittler, Hans-Gerd Koch und Gerhard Neumann. Bd. II: Apparat. New York/Frankfurt a. M. (S. Fischer) 1994. = DL App. (生前刊行書集, 資料編)

—— Nachgelassene Schriften und Fragmente I. Hrsg. von Malcolm Pasley. Bd. I: Text. New York/Frankfurt a. M. (S. Fischer) 1993. = NS I (遺稿集 I)

—— Nachgelassene Schriften und Fragmente I. Hrsg. von Malcolm Pasley. Bd. II: Apparat. New York/Frankfurt a. M. (S. Fischer) 1993. = NS I App. (遺稿集 I, 資料編)

—— Briefe an Ottla und die Familie. Hrsg. von Harmut Binder und Klaus Wagenbach (S. Fischer) 1974. = Ottla

3) ブロート版全集

Kafka, Franz: Erzählungen. Hrsg. von Max Brod. New York/Frankfurt a. M. (S. Fischer) 1946.

*カフカの一次文献からの引用及び参照は、本文中に()を用い、略号と頁数を記す。略号は、文献表の「A. 一次文献」の項にあるとおり、一次文献の翻訳については複数の既訳を参考にさせて頂いた上で、基本的には筆者が訳出した。例外的に既訳をそのまま引用した箇所についてはその都度、脚注あるいは本文中に示す。

B.二次文献

Kittler, Wolf und Neumann, Gerhard: Kafkas „Drucke zu Lebzeiten“. Editorische Technik und hermeneutische Entscheidung. In: Franz Kafka. Schriftverkehr. Hrsg. von Kittler / Neumann (Rombach Wissenschaft) 1990, S. 30-74.

Reuß, Roland: Franz Kafka-Hefte 5. Frankfurt a. M./Basel (Stroemfeld Verlag) 2006.

—— Franz Kafka-Hefte 6. Frankfurt a. M./Basel (Stroemfeld Verlag) 2008.

Robertson, Ritchie: Judaism, Politics, and Literature. Oxford (Oxford University

Press) 1985.
Schillemeit, Jost: Unbekannte Bote. In: Kafka-Studien, Herausgegeben von Rosemarie Schillemeit. (Wallstein Verlag) 2004, S.245-256.
Schütterle, Annette: Franz Kafkas Oktavhefte. Ein Schreibprozeß als „System des Teilbaues“ Freiburg (Rombach Verlag) 2002.
中澤英雄『カフカ・ブーバー・シオニズム』(オンブックス) 2011 年.
明星聖子「編集の善悪の彼岸—カフカと草稿と編集文献学」『文学』2010 年, 9・10 月号, 188~202 頁.
——『新しいカフカー「編集」が変えるテキスト』(慶應義塾大学出版会) 2002 年.

Eine Überlegung zu „Ein altes Blatt“ – Wenn man es als einem Teil von Oktavheft 3 liest.–

Annu Sakikawa

„Ein altes Blatt“ ist eine kurze Erzählung Franz Kafkas, die 1920 im Band „Ein Landarzt“ erschien. Manuskripte von dieser Geschichte hat Kafka in einem von einigen kleinen Heften geschrieben, die „Oktavhefte“ genannt werden. Die Veröffentlichung einer neuen Edition, „Historisch-Kritischen Franz Kafka-Ausgabe“ (FKA), hat uns ermöglicht, die Manuskripte zu prüfen. Das Ziel dieses Beitrags ist es, diese Kleingeschichte mit Hilfe dieser neuen Edition zu analysieren.

Aus dieser Analyse ergab sich, dass einige wichtige Beweise für den Zusammenhang zwischen „Ein altes Blatt“ und „Beim Bau der Chinesischen Mauer“ in der Brodschen Ausgabe und Kritischen Ausgabe verborgen waren, was die Notwendigkeit verdeutlicht, die Handschriften zu untersuchen. Aber gleichzeitig hat sich auch herausgestellt, dass das Editionsprinzip von FKA, besonderes in seinem Einteilungsprinzip der Bruchstücke subjektive Auslegungen des Herausgebers enthält, und vielfältige Interpretationen verhindert. Das heißt, dass FKA mit dem Anliegen, die Objektivität des Textes für wichtig zu halten, im Widerspruch steht.

Keywords: Kafka, Edition, Manuskript.